フェートン号来襲

十月四日

日本の将軍が朝鮮国王に今や彼の使節を送ってもよいと知らせた。しかしその時、朝鮮国王はそれを拒絶した。ところが今から三年前、朝鮮国王は日本の将軍に今こそ彼の使節を送りたい旨を知らせた。それを日本の将軍は、今年一八〇八年に、使節が一人の閣老(注51)によって対馬島で応接されるとの条件で受け容れたが、それに朝鮮国王は従わず、彼の使節を同島に送ることを拒否した。一方、そこでは、おそらくロシア人はこれに関係しないのではないかと思われる。これらすべてがどこまで真実なのか私は保証することができない。というのはそれらはすべて人の噂に依るものだからである。

1646年正保3年

十月四日（文化五年八月十五日）　火曜日

今朝すでに、ヨーロッパ船(注52)一隻が視界に入ったとの知らせが来て後、奉行は私に十時頃に、同船はオランダ船かどうか私の考えを尋ねさせた。それに対して私はもう時期が遅くなっており、確かなことは言えない。充分用心深くしなければならぬが、それがわれわれの船である可能性はある（というのは、九月二十九日という前例(注53)もあるから）と答えた。この答えをもって、年番通詞は帰って、行った。

十二時近く同船がさらに近づいて来たとの通知を得たので、奉行は私に対し、慣例に従って二人の代表委員を検使の方々と共に港外に派遣するよう通知させた。(注54)そこで私は簿記役ホーゼマン(注55)と商務員補スヒンメル(注56)を委員に任命した、そして彼らに、船の上官たちにあてた警告のためのいつもの手紙を持たせてやり、さらにそれがバタビアの会社上役たち(注57)により送られて来たオランダ船でないことが彼

らに少しでも明らかになったら、直ちにそのことを検使たちに知らせるようにとのさらに詳しい口頭命令も与えた。そこでこの委員団は検使の方々とともに港外に赴いた。

六時頃に簿記役ブリンクマン[注58]が、私を寝床に（というのは、私は病気で臥せていたので）訪ねて来て、船は神崎[注59]を回って来たと知らせた。私は病気であったけれども、好奇心が私を駆りたてて、寝台からぬけ出させ、そこなら何か聞き出せるかと通詞仲間のもとに赴かせた。そして思ったとおり私はそれから少し後に港外から来た一隻の〔注進〕船から、船はオランダの旗を翻しているが、何か怪しいとの情報を得た。私は直ちに家に戻り、そして全会社職員を私のもとに召集した。そして私がそうしている間に、年番大通詞[注60]〔作三郎〕が来て私に、二人の代表委員が捕えられたと告げ、さらに私がそれがどんな船だと考えるかを尋ねた。私は彼に、何とも言うことはできないが、しかしそれはロシアあるいはもしかしたらイギリスの船であることは確かだと推量すると言った。その答えを作三郎は持ち帰った。また私は直ちに、将軍の朱印状の納められている樟木の箱[注61]と会社の銀細工[注62]を一まとめにして取り寄せ、それを運ぶのに必要な日雇い[注63]たちとともに逃げ出すあらゆる準備を整えた。その一方私は勝手方[注64]を物干場[注65]の上に見張りに立てて彼が何かわかったら直ちに私に知らせるように命じた。

六時半頃、多吉郎が私のところに来て、こう言った。すなわち、ともに港外に出て一人は直ちに御番所[注66]〔西泊〕に行っていた検使たち[注67]が、以下の報告をした。すなわち、例の船はオランダの旗を掲げて入港して来たため、検使たちは、オランダ代表委員たちの小船とともに船を進め、そこに向かって

漕ぎつけた、そこからなお少し距離をおいたところで、代表委員たちは同船に向かって、いかなる船であるかと呼び掛けた、するとオランダ船だとの答えがあった、とかくするうちに、一隻の艀(注68)が舷側から下ろされ、それはオランダ代表委員の小船(注69)に向かって漕ぎ寄せられた、そして代表委員はそれに向かってもう一度、船はバタビアからのオランダ船かと尋ねたところ艀の艇長がそれに対して、そうだ、オランダ船だと答えた、艀は直ちにオランダ代表委員の小船（それは検使たちの小船のすぐそばにいた）の隣に止まると、艇長は、皆様はボートに乗りなさいと言った、それに対し代表委員たちは、われわれにはそれは許されない、われわれは検使たちとともに行く、と答えた、すると船上から何やら伝声器(ルーベル)(注70)で呼びかけが行なわれ、とたんに艀から乗組員が、手に鞘を払った広刃の刀(注71)を持って、オランダ代表委員の小船に飛び移り、そして、二人のオランダ代表委員をそこから引き出し、船に連れ去った、その間通詞ロクセロー Rokusero(注72)は検使たちの小船に飛び移り、そして他の通詞二人(注73)は水に落ち、泳いで逃れたが、オランダの旗は、この間ずっと船上に翻りつづけていた、と。

以上は多吉郎とロクセローによって私にそう語られたのだが、多吉郎は私に、奉行は両検使に、二人のオランダ人が戻って来るようにさせねばならない、もしそうでなければ彼ら両検使は生きて再び奉行所に入って来ることを許されないと命じた、と話し、さらにまた私に、オランダ人たちが帰されるよう要請する一通の手紙を船に書き送ったら良くないかどうか私の考えを知りたいと尋ねた。それに対して私は、まだどこの船かは不明であるし、そのうち、船長が（代表委員は外交官であるから）

〔彼らを〕解放する意志があるかどうかを訊す手紙を書いてもいいが、私は船長がそうするかどうかは、はなはだ疑問に思っている、と言った。われわれがこのことについて話している間に、叫び声が聞こえ、そして同時に年番大通詞が来て、三艘の武装した小船が湾内にあり、そのうちの一艘は、われわれの島〔出島〕のすぐ近くにある大黒町（だいこくまち）に着岸したと言って、われわれ一同直ちに出島から退避せねばならぬとの命令をもたらした。そのとおりに私は残りの職員たちとともに、朱印状の入っている樟木の箱と会社の銀細工（これがわれわれが持参することの出来たすべてであり、然り、われわれの衣類さえ何も持参できず着のみ着のままである。）を持って奉行所へ逃げ込んだが、時ははや七時であった。私は直ちに奉行のもとに案内されたが、見れば奉行は甲冑で身を固めており、そして私に次のように話しかけた。すなわち、「ご安心ください。ここにいればあなたには何の災難も起こりません、捕えられたオランダ人たちを、私はあなたにお返しすることを約束します」と。私はそれに対して奉行閣下に謝意を表したが、その後、われわれは大通詞作三郎によって小部屋に導かれた（奉行所においては、すべてが極度の混乱と狼狽の状態にあった）。そこにいて、われわれは、〔三艘の〕小船は岩壁には着かず、いたるところ漕ぎ回わったが、そのことにつき奉行は、私がこれをどう考えるかを尋ねさせたと知らされた。それに対して私は、小船はおそらく水深を測ったのであろう、それ故私は船がもっと近づいて来るのではないかと気遣っている、と述べた。十時頃になって、それらの小船は戻って行ったとの報告が来たが、同時にまた私は近隣の領主たちが、彼らの家臣たちとともに呼び出さ

れたと知らされた。そして私が驚いたことには、両御番所にはせいぜい二〇人か二五人足らずの兵士しか配置されておらず、そして長崎においては武装できる下検使の数はほとんど一五〇名を超えないものであると聞き及んだ。その後間もなく、ともに大通詞である助左衛門と多吉郎が、検使たちおよび小通詞並甚左衛門(注74)〔末永〕とともに、もしも可能ならば、二人のオランダ人か、もしくは乗組員のうちから二人の男を拉致するために、港外へ赴いた。十一時頃に奉行は見廻りのため出て行ったが、その後間もなく帰って来た。そして私はさらに次のような通知を受けた。すなわち、町年寄たちが、武装した下検使たちと共に、出島(注75)、同じく唐人屋敷(注76)ならびに米倉(注77)の見張りについた、また老外国人世話掛(注78)が加農砲を携えて大波戸の守りに立った、と。

十二時頃に大通詞作三郎が私を呼んで私に、奉行は二人のオランダ人を取り戻すまでに極めて長い時間がかかっているので非常に苛立っており、そして奉行閣下は即座に秘書官(注79)に対して次のように命令した、と言った。すなわち、彼、秘書官は舷側に行き、そして柔和な態度と丁寧な言葉をもって、乗船しようと試みなければならない、続いて彼は船長を訪ねる、そして彼に極めて友好的に、また丁重に話しかけ、そして同人の来航の理由を尋ねよ、そしてもし彼が何か要求すべきことがあれば、彼がそれを言うように仕向け、その後秘書官は、もしそのようにして二人のオランダ人を解放するならば、彼〔船長〕の要求は満たされるだろうと言うように、そしてもし船長が、それをしようとしないなら、その場合は、秘書官は不意に広刃の刀をもって船長の首に切りつけ、そして自らは直ちに腹を

上條徳右衛門

切れ、と。

作三郎は私に、秘書官は行く決心をしていると言い、そして私の考えを質したので、私は次のように言った。すなわち、そのような狂気じみた攻撃は、私の考えでは、ほとんど利益がないだろう、というのは、そうすれば船長も秘書官も死ぬことになるし、目的を達成することにもならないからである。それよりも大勢の武装した兵員を船上に来させて、それによって強行しようとするほうがもっと良い方法だ、と。しかしそれに対して作三郎は私に、兵士たちがおらず、また二、三日以内には来ることができない、と言った。われわれがこの件について話している間に、小通詞並甚左衛門〔末永〕が奉行所に来て、次のように話した。すなわち、彼は検使たちとともに船の近くに行っていたが、船長は、一艘の艀に武装した乗組員を乗せて出してよこした、すると簿記役ホーゼマンがその中にいた、彼、甚左衛門はこの船はどこから来たのか、また何のために来たのか、そしてなぜ船長は二人のオランダ人を捕えたのかと尋ね、彼、船長は二人のオランダ人を返すつもりかどうか、もし彼にその気がないのなら、同船の乗組員のうちの二名を引渡してほしい〔と言った〕、そこでホーゼマンは、そのことを船長に伝えるために船に戻った、そしてその後間もなく甚左衛門は、ホーゼマンとスヒンメルは一通の短い手紙を認める筈であり、そして〔受取り次第〕日本の小船は直ちに立ち去らねばならないとだけ船長が言った、との知らせを得た、と。一方、彼、甚左衛門は私に、船は非常に大型で四〇門以上の加農砲を船上に備えている、と言った。甚左衛門は次のような内容の手紙を持参した。

一八〇七年十一月―一八〇八年十一月

ベンガルからの船が一隻来ました。この船長の名前はベリュー(注80)と言います。〔船長〕閣下は水とすべての食料品に事欠いており、船長はそれを提供されるよう要請しています。

（署名）ホーゼマンおよびスヒンメル

この短い手紙の内容を私は直ちに奉行に知らせたが、そのさい奉行閣下は私の考えを尋ねた。すなわち、水と必需品が彼、船長に与えられたら、二人のオランダ人が解放されることを私は保証できるかどうか、と。私は、そのことを保証することはできない、何故なら私は今やその船が確かに敵国船であると推測するからだ、と言った。奉行は、その後さらに私の考えを尋ねたので、それに対して私は、もし彼、船長が二人のオランダ人を解放するなら、そのとき私は彼に私の名誉にかけて水と食料品が与えられることを確約する、という内容の、短い手紙を一通、船長あてに書くべきだとの意見であるが、しかし奉行が彼にそれらを送らなければならない、と言った。奉行はこれを是認し、そうすることを私に約束した。そして私は次のような短い手紙を船長あてに書いた。すなわち、

当湾内に投錨中の船の船長宛て

貴殿よ。

現在私は貴下により船上に拘留されている二人のオランダ人から、貴下が水と若干の食料品とを

必要としている旨の報告を受けている。もし貴下がこの手紙を受取りしだい、上記二人のオランダ人を送り返すなら、私は貴下に、この国におけるオランダ人の上長[注81]〔商館長〕として私の名誉にかけて、貴下が、長崎奉行閣下から、水とその他の食料品を恵与されることを保証する。

一八〇八年十月五日、早朝一時

追って、貴下が必要とするものがあれば、どうぞそれを手紙にして両オランダ人に与えて欲しい。

十月五日

この手紙を持参して小通詞並甚左衛門は一人の勘定方とともに出発したが、検使たちと彼らの率いる小船は皆両御番所に残ったままである。

五日　水曜日

夜明けとともに、私は例の船が神崎（こうざき）に碇泊しているのを見たが、私はその時はまだ船舶旗を識別できなかった。しかし私は四、五隻の艀が船外に下ろされており、その中で乗組員のばたばたした動きがあり、彼らは水を催促するため動いているかのように見えた。

八時半に私は再び例の船を見に行った。そしてその時は同船にはイギリスの旗が翻っており、一艘の大型ボートが舷側に横たわっており、そして別の一艘の艀が同船から岸の方へ漕ぎ進むのを見た。そこで私は直ちに年番通詞に、船はイギリスの旗を翻しており、そして艀が幾艘も手漕ぎで岸の方へ往ったり来たりしていると奉行に知らせるように、と言った。私は彼らはおそらく水と食料品を彼ら

自身で岸から運んだもので、おそらく風向きが良いので彼らは出帆するに違いないと推量した。その後間もなく年番大通詞が再び私の許に来て、奉行は、まだ長崎には一人の兵士もいないので、くやしさで地団太を踏んでいると言い、そして私に、例の船を抑留するにはどんな手段があるか、また、船上にはおおよそどれほどの乗組員がいるだろうか、と尋ねた。私はこの点につき次のような回答を与えた。すなわち、その船は、甚左衛門が昨夕話したように、武装されているとすれば、すなわち、加農砲四〇門を備えているとすれば、間違いなく三〇〇人もしくはそれ以上の人員が船上にいるに違いなく、同船を当地に抑留するためには、同船が出港するさい通らなければならぬ出口に大型バルク船を何艘も沈めるということ以外に助言の方法を知らない、しかしそれをするには、作三郎の言うとおり、多くの時間と労力を必要とするに違いなく、そうこうするうちに船は出帆してしまうであろう、と。その点について私はさらに、これ以外の方法を知らないと言ったが、作三郎はこの答えを持って奉行のところに行った。そして間もなく再び戻って来て、奉行は狂気のように残念がっている、と言った。

十一時に私は、私がまったく着のみ着のままで何もないので、シャツか何かを取りに、ちょっと出島へ行くことを許してもらえないか、と要請させた。そしてそれが許可されたので、若干の衣類を取ってのち、われわれは奉行所に戻って来た。出島は燧石銃[注82]で武装した下検使で占められ、そして水門[注83]の前では扉ごとに砲車も砲架もない一ポンド加農砲[注84]が土をいっぱいに詰めた若干の俵の上に据えられ

ていた。大波戸に据えられた加農砲は、同じ態勢を取っていたが、それらはいくぶん大き目のものであった。

十二時半に私は、今朝一時の私の手紙に対する文書による回答を得たが、それは次のような内容のものであった。すなわち、

尊敬する閣下へ

食料品が船積みされたなら、われわれは直ちに解放されるはずです。船長はこれ以上必要とするものがなく、そして閣下の友情に対し謝意を表するよう命ぜられています。私は取急ぎ署名します。

閣下の従僕、

（署名）G・スヒンメル

（下に）船長は、病人たちがいるので、牛または山羊(注85)いく頭かを要求しており、それがなければ閣下〔船長〕は出発することができない。

長崎投錨中のイギリス・フリゲート船の船長

（署名）グリットウッド(ママ)・ベリュー(注86)

この内容は、奉行に示すため年番大通詞により翻訳された。そして奉行は私に食料品を与えるべき

奉行　水と食物の要求についてドゥーフに意見を聞く
ホウゼマンの帰還

か否か、私の考えを問わせた。私は次のように返答した。すなわち、それは奉行のお望みしだいであるが、しかし私は、それがイギリス船であることは明らかであり、したがってオランダ人の敵であるから、彼〔船長〕は、食料品や水を得られないまま捕虜を解放するとは考えない、と。一方奉行は、もし〔奉行〕閣下が彼〔船長〕に食料品を与えるならば、捕虜を解き放されることになるかどうか、または私がそれを保証することができるかどうか、と尋ねた。私は次のように言った。すなわち、私は確かなことは言えない、それは敵の言葉を決して当てにしてはいけないからである、しかしながら奉行がそれを承認するならば、水と必需品を送ってそれを試すことはできるだろう、と。そこでその後間もなく年番大通詞が再び私のもとに来て、奉行は、彼〔船長〕に水と必要とされる食料品とを送ることを決定し、〔奉行〕閣下はそれらすべてを準備するよう命令を出した、と言った。

四時に簿記役ホーゼマンが上陸した。そして直ちに奉行所に入り、そこに私も居合わせたが、私に次のように言った。すなわち、彼は船長によって神崎の岸壁に下ろされ、必要とする食料品を取って来るよう、そしてそれを自分で持参してできるだけ速やかに船に戻るよう命令を受けており、それを彼は誓って約束せねばならなかった、そして、彼ホーゼマンは御番所に行ったが、その場所に検使たちが大通詞助左衛門および小通詞才右衛門〔今村〕とともに居た。彼ホーゼマンは、同人たちに対しては、彼が船長により、食料品を取りに来るため岸壁に送られたこと、また船長が、そうすれば彼ら両人を解放すると約束したことしか言わなかった、と。しかし彼ホーゼマンは私に、彼が二通の短い手

紙を持参したと言って、その二通とも彼は私に手渡した。そのうちの一通[注87]は次のような内容である。

港内の焼き払い宣言

オランダの会社に所属している二人の者は、ディルク・ホーゼマンとヘリット・スヒンメルで、そのうちのディルク・ホーゼマンは上陸するが、彼〔船長〕自身のスループ船で岸壁へ向かうことになる。船長はわれわれ〔両オランダ人〕を捕えて捕虜にした。そして船長はわれわれを昨日の五時以来拘留している。そして〔一人は〕今三時に船から降りる。船長は、次のように言った。すなわち、できる限り速やかに食料品を送るように、と。そうすればスヒンメル氏が岸壁へ向かうようにし、そして〔船は〕沖に出るつもりである。もし彼〔船長〕が食料品を今夕以前に得られない場合は、彼は明朝までには、帆走して来て、日本の小船や中国ジャンク船をすべて焼き払うつもりでいる。

（署名）船長グリットウッド・ペリュー（ママ）

第2は英語の手紙

第二の手紙は〔英語で〕次のような内容である。

長崎のオランダ商館所属の二人の紳士、ディルク・ホーゼマンとヘリット・スヒンメルは、そのうちの一人は今や上陸しようとしているが、私の命令で、その目的のために武装された私のボートで捕えられ、そして十月四日（ママ）の五時以来拘留されている。

一八〇七年十一月―一八〇八年一月

二〇五

投錨中のイギリスのフリゲート船の船長
（署名）グリットウッド（ママ）・ベリュー

秘書官とは上條徳右衛門か

ホーゼマンがこの場で私に両通の短い手紙を手渡している間に、奉行は自らやって来た。大通詞多吉郎がそこに来合わせたため、われわれは一緒に奉行の側近く来るようにと命ぜられた。そこへ行くと私は通詞多吉郎に、彼が奉行に対し次のように話して欲しいと言った。すなわち、船長はホーゼマンを岸壁に送ってよこしたが、それは食料品を取りに来るためである、そして彼自身自ら食料品を持参して戻ることを誓って約束しなければならなかった、ホーゼマンは私に、一通はオランダ語で書かれ、もう一通は英語で書かれた二通の短い手紙（ここに掲げたもの）を手渡したが、それら両通の手紙を私は奉行の前に置く、と。そして大通詞多吉郎はそのオランダ語で書かれた短い手紙を翻訳し終って、日本の小船と中国ジャンク船を焼き払うとあるのを聞くと〔奉行〕閣下は立腹して立ち上り、部屋から出ていった。その後少し経って、秘書官が来てこう言った。すなわち、水と食料品はすでに一部分船に送られた、そして四頭の牛と一一頭の山羊もある、そしてホーゼマンは今やそれを持参して船に行き、できる限り、彼がスヒンメルとともに戻って来るよう心を配ることになっている。というのは、奉行はただ彼ら両人のことのみを一番懸念しているからである、と。その一方、秘書官は私に次のような短い手紙を書くように命じた。

当地投錨中のイギリスのフリゲート船を指揮する……・ペリュー船長宛て

貴殿よ。

今や現に昨日貴殿により捕えられた二人のオランダ人のうちの一人が、貴殿により要求された食料品を持って行くために、上陸した。同オランダ人は、彼が貴殿に、自ら再び船に戻ることを誓って約束せねばならなかったので、貴殿のもとへ四頭の牛と一頭の山羊を携えて行く。そして私はそれ故貴殿の約束通り、今や両オランダ人を私のところに一緒に送り返すことを貴殿に要請する。

長崎、十月五日。

そしてこの短い手紙を携えてホーゼマンは、日本の牛と山羊とともに船上へ行った。

ホーゼマンが出発し、そして私は大通詞多吉郎と二人だけになった後、私は多吉郎に次のように言った。すなわち、ホーゼマンが私に話したところでは、船長は両代表委員の胸に銃をつきつけて、オランダ船舶が当地に碇泊しているかと尋ねた、そしてそれに対し彼らが否と答えると、船長は、彼らの聞くところでは、それぞれ五〇人の兵員を乗せた数艘の武装した艀でオランダ船舶を探して湾内を巡航した、船長は十時頃再びやって来て、さらに彼らに、なぜ私が船に来なかったのかと尋ねた、それに対し代表委員たちは私が病気だと答えた、とのことである。

さらに船は三五〇人の乗組員を有するとのことで、多吉郎は以上のことを書面に記[注88]して、その内容

一八〇七年十一月―一八〇八年十一月

を奉行に知らせた。

また私は、その間になおもう一度、船からスヒンメルの次のような内容の短い手紙を受取った。すなわち、

閣下よ。

水、野菜および薪(注89)を、高貴にして勇敢なるペリュー氏が受取りました。しかしながら私は牛と豚(注90)が船に到着するまで船上に留まらねばなりません。その後に私は戻ることができるのです。なお若干の馬鈴薯(注91)と薪につき閣下〔船長〕の要求がありますが、それはこの最後の物品が大いに不足しているからです。

私はこの手紙が発送されたら、閣下がこれをきわめて速やかに受理されるよう望んでいます。

尊敬する閣下の従僕

（署名）G・スヒンメル

この短い手紙のことを私は直ちに知らせにやり、またホーゼマンが、あれこれのものを持参してすでに船に戻ったとの知らせを得た。

九時頃に捕虜となっていた両代表委員が上陸して来た。そして直ちに奉行所へ案内されて来た。そ

検使菅谷保次郎上川傳右衛門

こには私もなおいたが、その場ではすぐに秘書官が来て、奉行の名において、彼らが解放されたことに対して祝辞を述べた。そして私は彼らのために秘書官に対し、捕虜を解放させるために閣下がとった労に対する私の感謝の意を奉行に伝えるように頼んだが、秘書官はそうすることを約束した。

その後、なおその他多くの奉行所の人々が、捕虜の方々が解放されたと聞いて、祝辞を述べに来た。そのうちには保次郎様およびゲンネモン Gennemon[注92] 様という名の二人の検使もいて、彼ら両人は、奉行から、二人のオランダ人か、さもなくば〔イギリス〕船乗組員のうちから二人を拉致するよう命令され、もし彼ら両検使がそれをし損なったら二度と再び生きて奉行所に顔を出すことはできないとされていた。私は、それらの方々にも挨拶を行なった。そして上記の方々が置かれている酷しい情況に対して遺憾の意を表した。しかしながら、今や彼らは二人のオランダ人を解放し連れ戻したので、私は彼らに、この幸運な事件の結末を見たことに対して祝意を述べ、そして彼らはそれに対して私に謝意を表した。

その後捕われていた両代表委員が、私に次のような短い報告を行なった。すなわち、彼らは、昨日昼彼らの受けた委任に従い、検使の方々とともに、この湾に向かって帆走している船はどこの船かを問合わせるため、沖へ航行した、彼らは五時頃検使の方々とともに、他の旗がなく、オランダの旗だけを所定の場所に翻していた船に向かって航行した、彼ら〔の小船〕は検使の乗った小船の側に寄り添い、検使から、いかなる船かを尋ねるよう命ぜられたが、その時、例の船からオランダ船だと大声

で叫びかけられた、そうこうする間に、一艘の艀が船から下ろされ、それはあっと言う間に両代表委員の小船に近づいた、そして両代表委員はもう一度それに向かって、これはいかなる船かと尋ねたところ、それに対し艀の艇長はバタビアから来たオランダ船だ、そしてさらに皆様は艀に来なさいと答えた、そこで両代表委員は、それはできない、われわれは検使の方々と一緒なら乗船しようと答えた、すると途端に伝声器（ルーベル）で船から何やら呼びかけがあり、その瞬間数名の鞘を払ったサーベルを持った乗組員たちが両代表委員の船に飛び移って来て、そして暴力で両代表委員を無理にボートに連行したが、そのさいスヒンメルは彼の帽子と靴を失なった、彼らはそれから船上へ、そして船長室へ連れて行かれ（オランダの旗はその間ずっと翻り続けていた）、そこに間もなく船長が二人の兵士を連れて入って来て、そして船の上官たちへの警告のいつもの手紙[注93]と、同じくまた代表委員たちと検使たちの間に起こった出来事の記録を彼らから奪い取った、ついで二人の兵士は彼らの抜き身のサーベルをかざし、船長の命令で、各々の胸の上にそれを突きつけ、そしてそのままの状態で船長はオランダ船はどこに碇泊しているかと尋ねた、それに対し彼ら両代表委員は、今年はまだ船は来ていないと答えた、それに対して船長は「私が見に行く」と言った、そう言うと彼は果して数艘の武装した艀で船から離れ、そして夜十時頃に戻って来た、そしてその時、彼らに短い手紙を一通書くように命じた（これが私が夜十二時四、五分過ぎに受取ったものである）、それから、彼らが船上にいた間ずっと船長または士官たちは、船長がスヒンメルを、もしも本日昼に食料品が早く来るように配慮するため上陸したホー